エドウィン・ミュア著『自叙伝』（ 6 ）
An Autobiography by Edwin Muir

横山　竹己訳*
Takemi YOKOYAMA*

当時、私は人間愛というものを感じることができなかったが、デーヴィッドは人間愛に溢れていた。彼は乞食たちや露店商人たちの傍らに立ち止り、長い間彼らと話をしていたし、誰とでも自然に接することができた。彼にとっては階級区分など存在しないようであり、人々をただ人間として見ていたにすぎなかった。それゆえ、彼は貧困や悪徳に厳しい姿勢を示さない人を白い目でみた厳格でれっきとした地位にある人たちを除いて、皆から好かれた。また人を批判するということがどういうことか知らなかったし、自分以外に人を責めることもなかった。乞食たちと話した後でも、自分は一つの役割を果たしているのだと考えていた。もちろん、こういう人たちに話かけさせた衝動は完全に本物であり、彼本来の性質と完全に一致していた。彼は社会主義者であったが、社会改革とか階級闘争といったことをまともに考えなかった。だが、もし万一ファルサイドで革命が勃発したら、彼は真っ先にバリケードに人を配置したであろう。そして、その後、大声で笑ったり、いろいろ悩み苦しんだりしたであろうし、またバカなことをしてしまったと考えたであろう。彼の性格は気取らず率直であったので、いつ行動に出るか自分でもわからないことが度々あった。そして自分の親切な行動が本物であるかどうかを考え込んでいた。彼は完璧な友人であり、本当にデリケートで思いやりがあったし、許し許されたいという思いを強く持っていた。あの二年間、彼がいなかったら、私はどうしていいかわからなかったであろう。

その後、私は同じ事務員のボブ・S と友だちになった。彼は私に恥をかかせて事務職の労働組合に加入させ、地元の労働運動に接触させた。私はデーヴィッドとボブとはそれぞれ別個の友人としてつき合った。この二人には共通点がなく、うまくいかないことを知っていたからだ。ボブは『ザ・ニュー・エイジ』の読者で、目立った性格の持ち主であり、誰よりも生一本で高潔な男であった。私と同様、可能な限りの教育を受けたが、それを職場の仲間のために使うことに熱心だった。しかし、職場の仲間に言及するときは、口汚い言葉を使った。そして感傷的になることを、まるでそれが資本主義そのものよりも大敵であるかのように、非難した。議論においては相手をぎゃふんと言わせたが、彼の反論にはウィットが利いていた。彼いわく。「私はキリストとカール・マルクスの考えをとても尊敬しているが、先にスピーチをされた方に言いたいのは、彼はキリストから彼の経済を、マルクスから彼の宗教を受け入れていることだ」と。彼のウィットは人々を当惑させたが、かまわず押し通し、人々が当惑するのをみて楽しんでいた。彼は親切で寛大であり、議論においては容赦しなかったが、自分の誤りが自分に不利だとわかると、その誤りを潔く認めるなど、良心的に道理に服した。彼と彼の弟のエドワードと私の三人で膨大な時間を費やして、世のため人のための対策や出世を一途に志した人たちや感傷的な人たちの挫折に対する対策を練ったが、自分たちの利益になることは何も考えなかった。

こうした友情に恵まれたにも関わらず、私は心身ともに優れない状態にあった。胃の不調が再発したのだ。散歩にも、本にも、友人たちとの会話にさえも昔の汚れた薄い膜が覆い被さっているような感じであった。もちろん、友人たちには恥ずかしくてそのことについては何も言わなかった。医者に診てもらい、さまざま治療を受けたが、効き目はなかった。体の大きな、ブローズを常食にしている一人の医者が毎晩寝る前に発酵を抑えるため大皿一杯のポリッジを摂るように薦めてくれた。これをやってみたが、ひどい目にあった。二回目の冬が来たとき、激しく咳き込むようになったが、その咳はなかなか抜けなかった。次第に痩せてきてとうとう床に就かねばならなくなった。そして数週間そうしていた。例の医者は私の肺が病に冒されているのではないかと思ったが、結局そうでないことがわかった。こうして、再び事務所に、あの悪臭と犬が骨を奪い合っている場所によろめきながら戻っていった。この数週間私に払ってきた給料の見返りを得ていないと思った老 C

2017 年 10 月 19 日受理
* 東北工業大学名誉教授

氏は、感情をひどく損ね、非難の眼差しを向けた。

胃や咳に苦しめられたこれらの歳月の間に、私はハイネの別な側面に関心をもったが、それは私を回復させる力になるどころか、却って私のレジスタンスの力を弱めたにすぎなかった。私は『カンタベリー詩人叢書』の中の何人かの有名な作家が翻訳したハイネの短詩集を手に入れた。ハイネの詩には絶妙なウィットが効いているところもあるが、病弱な感じや墓場を連想させるところがある。その当時の私を引きつけたのはそういうところであった。墓や経帷子についてたくさんの詩を読んだ。今はこうした詩の一、二編しか憶えていないが、当時はたくさん暗唱していた。例えば、特に次のように始まる詩があった。

夜は私の瞼に、私の口に
鉛を置いた。
硬直した脳と胸と共に、
私は死者の間に横たわった。

死者がこのように横たわると、墓をノックする音が聞こえてきた。「ハインリヒ、起きなさいよ。永遠の日が始まり、死者は蘇ったよ。永遠の喜びが始まったよ」と彼の恋人が言うと、死者は次のように答える。「いとしい人よ。私は起きることができない。目が見えないからだ。目は悲しみの涙で破壊されてしまったのだ」と。彼の恋人は再び彼を励ますが、彼の心臓が彼女の辛辣な言葉の矢で突き刺され、頭も彼女が彼を捨てたとき彼が発射した弾丸で打ち砕かれたために起き上がることができないと答える。最後に彼女の願いが彼を動かし、彼は立ち上がろうとする。「それから、私の傷は開き、血が頭と胸から流れ出た。おお。見よ。私は目を覚ました！」

死の思いに病的に耽っているこの詩は私を深くとらえた。私は、死んだことをよく知っている死者と自分自身を重ね合わせた。私自身の何かが葬られた。オフィスで働いているときや道を歩いているときの自分は半分の自分でしかなかった。私は自分からはるかに遠ざかってしまったのを感じたし、また遠くから自分を危険なエネルギーで爆発している世界にいる青白い顔をした、栄養失調の、傷つきやすい青年だと見ることもできた。その頃、グラスゴー訪問中のある土曜日の夜、私はミュージックホールに行った。オーケストラが演奏する窪んだ狭いスペースの上の温かい照明が私の足下を照らし出したとき、エネルギーがこれら小さくて遠くにある非人間的な地点から自分の中に流れてくるのを感じた。それはわびしい孤独な慰めであったが、自分を孤立させる一種の手段でもあった。世の中がそのすべての姿とともに私から退却していった。気がつくと、私は冷めた憧れをもって、物、山、森、船、家、そしてショーウィンドーの中のつまらぬ品物をじっと見つめていた。それはヒーリーで経験した状態の繰り返しのようだった。しかし今回は、おそらく、骨工場の光景や悪臭に目や鼻を閉ざそうと懸命に努めたせいであった。それが習慣となり、その結果、普通の楽しいことにも目を閉ざすようになってしまったのだ。夜、入り江の対岸の町の夜景を見ながら、距離があたかも心の安らぎと幸福を与えてくれるかのように、あの町へ行ってみたいという欲求を強く感じた。

その頃の私はハイネの詩に夢中になっていたが、これがこのムードをあおった。南の椰子を夢見る凍てつく北の松の木をうたった彼の詩はまさしく私自身の精神状態を反映しているようだった。想像力という点だけで感動を受けた詩もいくつかあるが、例えば、大意を散文に訳してみた次の詩もその一つである。

夜は風雨がはげしく、空には星が出ていない。私は森のがさがさ音を立てる木の枝の下を黙ってさ迷う。

人里離れた一軒の猟師の小屋から灯りがもれている。その灯りにそそのかされてはいけない。そこはひどい状態になっているからだ。

目の見えない祖母が革製の肘掛け椅子に座っている。口も開けずに、彫像のように硬直していて、薄気味悪い。

きこりの赤毛の息子はののしりながら歩き回り、壁にマスケット銃をたたきつけ、そして激怒したり、嘲ったりしながら大声で笑う。

可愛い機織り娘は泣いていて、涙で亜麻糸を濡らしている。彼女の父親の猟犬が彼女の足元でくんくん鳴きながら横たわっている。

この詩のイメージの美しさと奇妙さに当時と同じく今も感動するのだが、実際私をとらえ、特に私のためにつくられたように思えたのは、距離と孤立に溢れている詩であった。ハイネの詩には‘einsam’（孤独な、人里離れた、孤立した）という言葉が何度も繰り返し出て来る。人里離れた一軒家、墓の中の孤独な人、ぽつんとたたずむ一本の松の木、そして孤独なハイネといった具合である。私はこの甘美な毒に浸り、うら寂しい、皮肉な、やや死骸のような詩を書き始め、それらをオレージに送った。彼はそれらを受け取ってくれた。私は二十六歳だったが、これが詩作の最初の試みであった。少し後になって、ボードレールを発見したとき、経帷子とか墓といったものをただ弄んでいるのではなく、本当に死に憑かれている人の

詩を読み、ショックを受け、これまでのようにハイネに夢中になることはなくなった。

その頃、『ザ・ニュー・エイジ』は、国家社会主義の代案としてナショナル・ギルズ(国家同業者組合)の提案を打ち出していた。私はこの新しい理論の熱心な支持者であったが、公正な考えをもってのことであって、私利私欲を考えてのことではなかった。このギルズの構想を練るに当たって、オレージと彼の協力者はサンディカリズム(ゼネスト、サボタージュ、テロなどの直接行動によって生産と分配の、ひいては社会の支配権を手にしようとするフランス起源の労働組合運動=訳者註)の最良の部分と国家社会主義の最良の部分を結びつけようとした。ギルズができると、それは国家に所属し、そこに雇われた労働者が管理運営を行うことになった。官僚は可能な限り排除された。それは労働者の共和国をつくる鮮明で包括的な計画であった。そしてそれを実現する仕組みもあった。それは労働組合である。労働組合はギルズの先駆けであった。この構想はもてはやされた。当時労働組合は強力だったし、労働組合の職場委員(職場の諸問題を経営側と折衝する組合の代表者=訳者註)運動も始動していた。ヨーロッパ戦争が勃発しても、この運動は破壊されることなく続いた。この運動は、その後しばらくの間は、少なくともクライド川(スコットランド南部の川。クライド湾に注ぐ。河畔にはグラスゴー、クライドバンク、グリーンノックなどの町がある=訳者註)沿いでは、一層強力になっていった。そして、その団体は、私もその一員だったが、『ザ・ギルズマン』(*The Guildsman*)という月刊紙を発行していた。これはかなりよく売れた。しかし、戦争が終結すると共に、労働組合は弱体化した。オレージ自身は、メジャー・ダグラス(Clifford H. Douglas のこと。一八七九―一九五二 英国の土木技師、経済学者。消費者の購買力を高めるためには、生産者側に価格を引き下げることができるように政府が補助金を支給するとか、消費者に経営側の利益を分配すべきだとする社会信用説(Social Credit)を唱えた=訳者註)の影響を受けて、銀行の独占事業が破壊されない限り、何もできないと確信していた。そして、ナショナル・ギルズの構想は忘れられていった。これはこの国で試みられたもののうちで最も満足のいく社会主義国家計画の一つであった。これに対する真の批判はおそらくシェース師(E.=J. Sieyès 一七四八―一八三六 フランス革命の理論的指導者、政治家、聖職者。総裁政府の五人の総裁の一人=訳者註)に対するカーライルの批判であろう。いわく、憲法をつくるのは簡単だが、本当に難しいのは人々をその憲法下で暮らすようにさせることだ、と。

戦争が勃発してからしばらく、ハイネから、また経帷子とか墓といったものから逃れていた。その頃、友人が自分の会社の職を世話してくれた。私は依然として胃が不調だったし、咳も残っていた。様々な医者に通い続けていたが、ついに「自然療法」の医者を見つけた。彼は実際いくらか改善の結果を出してくれた。私は二十七歳であり、陸軍に入隊していなければならない一人であった。分裂病の初期の段階にあった私にとって、入隊の見通しはどうでもよいことのように思えたが、また一方では、頭部のたてがみが渦を巻いて私を飲み込もうとしている悪夢のようにも思えた。とうとう、ある冬の夕方、雨に濡れた街路を何時間も歩き、グラスゴーの新兵徴募の事務所を行ったり来たりした後、中に入り、階段を上がり、部屋に入って行った。その部屋は身なりのよい青年、身なりのよくない青年、がっしりした体格の青年、痩せた青年、健康な青年、病気の青年、そして自信に満ちた青年などで溢れていた。どうして私がそこに行ったのか、私自身の良心がそうさせたのか、そこへ行くべきだという普遍的な提案がそうさせたのか、私にはわからない。部屋に入った時、そこは恐怖と惨めさに満ちていた。それが部屋にいた他の青年たちのものだったのか、私自身のものだったのかはわからない。それがただ部屋に漂っているように思えた。それが部屋に入ったときの雰囲気であり、吸い込んだ空気であり、嗅ぎつけた空気であった。今にも神経衰弱になりそうな青年将校は、恐怖が彼の肩にも座しているかのように、いらいらしながら我々を一列に並ばせ、脱帽して彼の後について誓いを繰り返すようにと言った。私からちょっと離れたところにいた青白くて丸顔の、むき出しの睨みつけるような目をした青年が頭を妙にかしげて立っていた。脱帽の命令が出たとき、彼は手を上げて、躊躇しながら帽子に手をやった。だが脱帽はしなかった。青年将校は彼に向かって叫んだ。とうとう彼は脱帽した。彼はまったくの禿頭であった。それは恐ろしい魔術によって彼が帽子と髪の毛を同時に脱いだかのようだった。みんな顔を背けた。青年将校も顔を真っ赤にし、「すまん。でもね、ここでは命令には従わねばならんのだよ」と言葉をつまらせながら言った。外に出たとき、階段の一番上でハイランド連隊の軍服を着て椅子に座っている老将校のところを通り過ぎた。彼は目を上げ、深いが冷静な哀れみの眼差しを私に向けた。結局、私は軍隊には採用されなかった。

第一次世界大戦中、私は造船会社で働いていた。会社にはグラスゴーから長い時間かけて市街電車に乗って通っていたが、その間、ほんの少しかじっただけのフランス語を、モリエールを通読しながら、またニーチェが高く評価していたスタンダールに夢中になりながら、独学で学び始めた。ま

た社会主義に関する本をたくさん読んだ。ハインドマン（H. M. Hyndman 一八四二―一九二一　英国の社会主義者。社会民主連盟の中心的指導者。後に国民社会主義党を結成＝訳者註）のマルクスの要約とか、オレージが編集し、出たばかりの『ナショナル・ギルズ』とか、スペインの作家ラミロ・デ・マエストゥ（R.W. Maeztu 一八七五？－一九三六　スペインの政治思想家、作家、評論家。多彩な思想遍歴の持ち主で、アナーキスト、サンディカリストから超保守的右派グループ「アクシオン・エスパニョーラ」の指導者となる。スペイン内乱勃発時に人民戦線側から銃殺刑に処せられた＝訳者註）の『権威、自由、機能』(*Authority, Liberty, and Function*)などである。マエストゥはサンディカリズム国家を予告し、当時のオレージに影響を与えていた。ある朝、会社に到着すると、事務員の一人が私の手からマエストゥの本を取り上げ、数ページぺらぺらとめくり、「こりゃ驚いたよ、ネッド。お前こんな本を読むのか」と言ったのを覚えている。その頃、私は放心状態に陥っており、事務員の一人が言ったように、「ぼうっとしていて」、精神分裂の状態にあった。そのため、愛情のしるしとして、あるいは見せしめとして、私は鼻であしらわれたが、それに対して寛大にも肩をすくめ、ただ受け流しただけであった。

ナショナル・ギルズ同盟が始動し、その支部がグラスゴーに設置された。支部の中心的人物はジョン・ペートンという若い製図工で、着想と行動に優れた才能を発揮した。彼はずっと前に死んだが、もし生きていたなら、労働運動に影響を及ぼし、好転させたであろう。彼は知的一貫性をもち、手段と目的について明確な考え、見事な実行力、さらに誰も逆らえない生まれつきの活力と魅力をもっていた。冬の間、我々の小さなグループは多忙であった。ナショナル・ギルズに関する本を徹底的に研究し、会議の席で演説し、『ザ・ギルズマン』を発行した。ペートンは論説を書いた。我々は『ザ・ニュー・エイジ』の排他的論調を和らげようとしたのだ。夏になると、グラスゴー周辺に遊歩に出掛けたが、あるとき、パブや喫茶店で見せかけの熱意をもって、「老ノアはダチョウ農場をもっていた」とか「神は邪悪な者を食料雑貨商人にした」を大きな声で歌い、チェスタトン（G.K. Chesterton 一八七四―一九三六英国の評論家、小説家、詩人、ジャーナリスト＝訳者註）の酒盛りの歌に夢中になった。これは我々がみな同志であることを示すためであったが、当時のインテリたちもそうせざるを得ないと感じていた。

私はナショナル・ギルズの雰囲気の中で多くの時間を過ごした。我々のグループのメンバーたちは親密な友人となり、いつもお互いの家にいた。同時に、これとはまったく別に、女性とたくさん恋愛をしたが、決して深いところまではいかず、長続きもしなかった。たくさん恋愛をしたことと長続きしなかったことは私の神経症の兆候であった。この兆候はグラスゴーを去ってフェアポートへ行く前から始まっていた。フェアポートでは二年間この兆候はまったく現れなかったのだが、また出始めたのである。これらの恋愛はみな、真面目なものもそうでないものもあったが、偽りの恋愛であった。というのは、自分が神経症から「解放されている」と考えていた間は、実のところ、私は禁欲的であったからだ。こうした恋愛は常に私の人生の背景にあったが、それは絶えず変化するドラマであり、それぞれの新たな恋愛は冒険と脱出の興奮に満ちていた。この間、私が志したことは、気づかなかったが、自分自身から逃れることであった。私のニーチェ主義も社会主義も自分自身からの逃避の手段であった。だが、最も効果的な逃避は心もうつろに色々な女性と次から次へと恋愛をしていくことであった。それぞれの恋愛は別な恋愛へと導いてくれるだけであったが、それは人生の不法な音楽の伴奏みたいなものであった。私はあまりにも深く出口のない心の不幸に閉じ込められていた。それゆえ、自分が何をやっているのかわからなかったし、束の間の喜びを逃すことができなかった。

フェアポートで過ごした歳月の間に、私は何とも説明できない、あるいは何かのせいにもできない漠然とした不安な恐れをときどき経験した。その本当の原因は骨工場での仕事だと確信している。この状態はさらに悪化し、私はこの状態をいっそう意識するようになったが、それが隔離と憧れの感情と密接に結びついていることを知った。店のショーウィンドーの前に立っていたり、田舎を散歩していたとき、宝石店の指輪や遠くの丘といったたまたま出会ったものを、冷めた叶わぬ憧れの気持ちをもってしばらくの間じっと見つめていることに気づき、はっと我に返ったものだ。それはまるで目の前にあるものを相当な努力をしないと手に入らないかのようだったし、そのときですら、目に見えない障壁が、あるいは距離の壁が私とそれらを隔離していた。私は透明の球かシャボン玉の中に入り込み、周囲の生活から隔離されていたが、それに到達したい、その中心にいたい、そしてそこで我を忘れたいという欲求に満たされていた。一人でいるときはたいていこういう精神状態だったが、他の人といっしょにいるときも、ときどきそれを感じた。私の放心状態はかなりひどかったので、私の友人たちは、私といっしょに外出するときは、私が迷子になるのではないかと心配して、私に目を配っていた。このように私は周囲と隔絶した状態にあったので、熱心に仲間を求め

た。私はこれまでにないほど社交的になり、孤独になった。この憧れと恐れの混じった気持ちに襲われ、夜度々目を覚ますことがあったし、ずっと後になってダンテを読みはじめ、アケロン川に近づいてゆく魂を描写したくだりに出会ったとき、自分自身の精神状態を理解することができた。

そして彼らは川を急いで渡る。
神の正義が、恐れが憧れへと変わるように
彼らを駆り立てるからだ。

だが、私の場合は、憧れが恐れに変わっていったようだ。私はどうでもいい物をじっと見つめていた。あたかもいつまでもその物に執着し、丘やショーウィンドーの安物に我を忘れ、その中にもぐり込み、そしてそこで安心したいと思っているかのようであった。同時に恐れが私の周りに壁を打ち立て、私を切り離すのであった。そういったものに憧れていたときでさえ、私はそこに目に見えない威嚇を感じた。どんなに単純なものでも危険であったし、私を破壊するかもしれなかった。ワーズワースの『マーガレットの愁傷』を読むといつもこのときの精神状態が蘇ってくる。

懸念が群れをなしてやって来る。
草のそよぐ音も私には恐ろしい。
雲の影が空を行くとき、
私を震わせる力をもっている。

のこぎり状の石やアザミは敵意ではち切れんばかりのようであった。それらはあたかも深手を負わせるためにこの世にあるかのようであった。岩に押し寄せる大波も恐ろしかった。私は波であり、岩だったからだ。それはあたかも私が物にあまりに近づいていたかのようであり、同時に測り知れないほど遠く離れていたかのようでもあった。

ある日、ほんの少しの間、この脅迫観念が私から立ち去り、事物を恐れることなくありのままに見たときの大きな心の安らぎを忘れられることができない。私は土曜日の午後列車に乗ってクライド川を渡っていた。柔らかい西風が吹き、川は黄色で、雨で増水していた。大量の水が私の中を流れ、血管にそのエネルギーを充満させ、精神から恐れを洗い流してくれているのを感じることができた。溺れている人が空気を求めるように、時にこういうことに思わず気づくこともあった。しかし、これらの時期の大半は、私の両肩まで大きくなった潜水鐘の中に閉じ込められて、透明な光を放ち、歪んだ姿形に溢れた海中の世界に住んでいた。

まだニーチェの影響下にあった私がものを書き始めたのはこの時期であった。私は短い覚え書きや警句を書いた。それらは毎週『ザ・ニュー・エイジ』に「我々現代人」という表題の下に掲載され、後に一冊の本となって出版された。いまその本が絶版になっていることをうれしく思う。これらの短い覚え書きの中で、私は何も知らずに、躍起になって創造的な愛とか、その愛と私が躊躇することなく非難した憐れみの違いについて一般論を述べた。私は、謙虚というのは自尊心の裏返しであり、愛の反対は憎悪ではなく同情だといった事実を指摘した。そして便利にも表面に近いところにある逆説を思いついたときはいつも、その逆説を最終的な真実とした。心の高ぶりから発せられた私の警句は『ザ・ニュー・エイジ』の読者の心をいくらか刺激したが、この心の高ぶりはもうひとつの逃避の手段、大地に降りて来ることへの叙情的な拒否にすぎなかった。私は勇気をもって、アーノルドのシェリーのように、真空の中で翼をぱたぱたと動かしたが、私の翼はにせ物だったので、実際に空気をあおぐことはなかった。この本の犯罪と言えば、私をまる裸にしたことである。翼は、やるべきことをやり、私から落下していった。私は翼がないことを強く感じたが、それでよかった。長い間気づかずに不幸であったが、いまは真に不幸であった。そして、知らなかったが、改善の可能性が出て来たのである。

警句を書いている間に、フランシス・ジョージ・スコット(F. G. Scott 一八八〇—一九五八 スコットランドの作曲家=訳者註)とデニス・ソーラ(D. Saurat 一八九〇—一九五八 フランス生まれの英文学者。ロンドン大学名誉教授。『ミルトンの思想』、『文学と神秘学』や『現代の作家たち』などの著作が多数ある=訳者註)と知り合いになった。ソーラは当時グラスゴー大学でフランス語を講じていた。スコットは当時学校の先生で、我々の時代に人気があった音楽はもう忘れ去られているが、今後も忘れられることのない実に素晴らしい歌をすでに書いていた。スコットとソーラは互いに絶えず行き来し、音楽やソーラの考え方を論じたりしている親友であった。ソーラの考え方は、彼が『三つの慣習』(*The Three Conventions*)の形式の中にすでに投入していたものであった。二人は温かく私を仲間に入れてくれた。そして、二つの新たな世界、音楽の世界と直感的思索の世界が私の眼前に広がった。ソーラは、寛大にも、私の未熟な一般論に自分の考え方と一致する点を見出してくれた。ある日、彼は自分が書いた対話を読んでくれたが、私はこの対話を聞いて興奮し、自分より進んだ考えをもった人について行こうという気持ちになった。この対話を今でも度々読むが、啓発的な考えに感動させられる。ただ、対話の全体的な筋立ては私の性分には合わ

ない。

スコットに出会ったとき、私は音楽に関してほとんど何も知らなかった。私は十四、五歳になるまでピアノを見たことがなかったし、その頃までに聞いた唯一のクラシック音楽といえば、「サウル」（ヘンデルが一七三八年に作曲したオラトリオ＝訳者註）の中の葬送行進曲であった。それはチャネル・フリート艦がオークニー来訪中に亡くなった一海兵隊員の葬式のときにカークウオールでブラスバンドが演奏したものだった。二十二、三歳になるまで、私は福音主義的宗教や社会主義、それに文学にしか関心がなかった。ニーチェを読んでいたので、これは効果があった。ニーチェは音楽に情熱的な愛情をもっていたし、また、著書の中で彼は絶えずモーツアルト、ベートヴェン、シューベルト、それにもちろんビゼーなどにも言及していた。こうしたことに刺激されて、セントアンドルーズ・ホールズでスコティッシュ・オーケストラのコンサートを聞きに行くようになった。これらのコンサートには何となく退屈することも、感動することもあった。私は楽しむというより義務感からコンサートに行き続けた。何としても「教養」を身につけようと心に決めたのだ。スコットを知るようになってから、音楽に対する偏見がなくなった。スコットが実際に音楽の能力を駆使している人だということがわかったからだ。まだ確信がもてなかったが、少なくとも、音楽は「こうあるべきだ」などというニーチェの一般論を考えずに、少なくとも自分の正直な耳で音楽が聞けるようになった。しばらくは詩よりも音楽をとても楽しんだが、これで十分ということはなかった。

フランシス・ジョージ・スコットの歌がどのくい広く知られているか私にはわからないが、最良の作品というのはほとんど宣伝されない場合が多いものだ。スコットランドの歌のために作曲している作曲家は決定的に不利な立場にある。ドイツやイタリアやフランスの歌なら当たり前なのに、彼の歌がイングランド人の歌手によってイングランド人の聴衆の前で歌われることはまずないからだ。もしスコットがイングランドの歌のために作曲をしていたなら、彼は天才的な音楽家として広く認められただろう。だが、彼はスコットランドに根ざしていた。彼の考え方や感情、彼の無節制、彼のラブレー主義、やや過度に形式を、つまりスペンサー（E. Spenser 一五五二？―九九、英国の詩人。『神仙女王』などの作品がある＝訳者註）ではなく、ダンバー（W. Dunbar 一四六五？―一五三〇、スコットランドの詩人。『詩人のための哀歌』などの作品がある＝訳者註）の形式を重んじる機知に富んだ感覚等々は、徹頭徹尾スコットランド的であった。彼はスコットランドの歌を復活させるために生まれてきたようなものである。そしていかなる障害にもめげず、同胞のスコットランド人からほとんど認められることなく傑作を次々と生み出しながら、それをやり続けた。彼の歌は、突拍子もないユーモアに溢れたものから優しい繊細な感情を表したものまで、実に多種多様である。優しい繊細な感情が彼自身のものでなかったら、フランス風だと人は言ったであろう。彼はフランスに深く敬服していた。

私は最初からスコットの爆発的な活力と彼の歌のこの上ない繊細さと優雅さのコントラストに心が打たれていた。国境地帯出身の他の人たちと同様、彼は、のみを叩くハンマーのずしんという音がまだ聞こえると思えるほどどさっと勢いよく切断される帝王のような立派な頭をもっていた。彼はぶっきらぼうで、非妥協的であったが、最も空想的な想念に耽るのを楽しみ、ただ楽しむためだけにいつまでもそれに耽っていた。それから、何の予告もなしに、何か言葉を発して組み立てたものをすべて壊し、壊したときの凄まじい音を聞いて楽しんでいた。それと共に、彼は実に繊細な感情の持ち主で、自分をよく知っている人にその感情を吐露していた。だが、いつもはランドー（W.S. Landor 一七七五―一八六四　英国の詩人、散文作家、劇作家。*Imaginary Conversations* などの代表作がある＝訳者註）と同様、激昂しやすかった。彼はいくつかの点でランドーに似ていたが、特に溢れんばかりの活力と完璧な形式の両方を持ち合わせている点でよく似ていた。ランドーの散文ではなく絶妙な詩のことである。グラスゴーには、スコットの音楽の議論の相手となるような音楽家はいなかった。それで彼はソーラと私で満足しなければならなかった。ソーラは音楽に関して造詣が深かったし、私は音楽についてほとんど何も知らなかったが、知りたいという意欲だけはあった。グラスゴーでスコットとソーラと共に過ごした日々は実に楽しいものであった。それゆえ、彼らの馥郁たる香りを分析するなどとてもできるものではなかった。

一九一八年初頭、ウィラ・アンダーソン（W. Anderson 一八九〇―一九七〇　モントローズ生まれ。小説や評論のほか、カロッサ、カフカ、ブロッホなどの翻訳や *Belonging: A Memoir* などの著作がある=訳者註）に出会った。彼女は住んでいたロンドンへ帰る途中グラスゴーに立ち寄ったのだ。一九一九年の初めに彼女に手紙を書き、また会えないかどうか聞いた。我々はその年の春に再会し、恋に落ち、その年の夏に結婚した。そのとき私は造船会社の事務員で、彼女はロンドンの女子大学の講師であった。私は六月にロンドンに行った。我々は登録所で結婚し、シェリンガムへ短い新婚旅行に出掛け、仕事に戻っていった。九月にモントローズの彼女の母親の家で数週間過ごした後、我々は、仕事もなく、お

金もほとんどなく、また分別ある友人たちが認めてくれなかった希望をもってロンドンに行った。もし妻が私を後押ししてくれなかったら、自分ではそのような思い切ったことはおそらく出来なかったであろう。私は依然として心の葛藤で麻痺状態にあった。私の結婚は私の人生の中でとりわけ幸運な出来事であった。

第五章　ロンドン

我々はギルフォード・ストリートに居を構え、仕事を捜し始めた。天候はよく晴れていてカラッとしていた。そして公園の木々は紅葉に染まりつつあった。空気は季節の変わり目でためらっているときのそよとも動かぬ静けさに包まれていた。そして交通の轟音を包み込み、遠くからしか聞こえないように思えるほど透明で濃密であった。我々もまた、仕事が見つけられないなどとは想像できなかったので、何も心配せずに、ただじっと待ちながら、静かな生活をしていた。今のところ姿を現さないが、仕事はあった。いつか姿を現すだろう。仕事捜しに疲れてケンジントン公園に行き、何もしないで夢うつつに午後の時間を過ごした。とうとうロンドンに来てから二週間が過ぎ、お金も残り少なくなってきたとき、二人とも同じ日に仕事が見つかった。ウィラは予備校の先生の職を、私は朝から夜まで小包を作らねばならない会社の事務職を見つけた。我々の仕事はきつく面白くなかったが、職を得てうれしく思った。そしてすぐにもっと適切な仕事が見つかると確信していた。

私の恐れはまだ私を苦しめていた。そして数百万人の中に投げ込まれたかと思うと、どぎまぎした。人々はとても親切に思えたが、その親切さはこれまで慣れ親しんできたのとは違い、異質で素っ気ないものように思えた。石や煉瓦やモルタルの建物の塊には怖気づいた。グラスゴーの人たちの穿鑿好きな視線とはまったく違うロンドン人の人情味のない視線は、自分が実在していないような気持ちにさせた。そして恐れと憧れの混じった感情が自然と動きだし、方向を逆転させた。その結果、私が何か物体か顔――私が選んだのではないから、どっちでもよかった――を凝視しても、それとの関係を樹立しようとはしなかった。ただ反対にそれが――有生物であろうと、無生物であろうと――私との関係を樹立し、私が実在していることを私に証明してくれることを望んだ。周囲のとても堅固な環境と私自身の虚しい切望のゆえに、私はいささか熱病にかかったように興奮し、恐れが喉につかえ、唇が渇いた。しかし一方、私自身の中心では、自分の力を結集し、何であるかはわからなかったが、とにかく何かを主張しようとした。

常にこういう状態ではなかったが、こういう状態が去来したときは本当に当惑するばかりであった。いつかよくなるとウィラが希望を失わずにいたため、我々は頑張ることができた。我々はその希望にのみ支えられて、毎晩へとへとになるまで働き続けた。その希望はとても強かったので、その当時の私の記憶に残っているものは幸せだという感情だった。数か月して二人ともインフルエンザにかかってしまい、妻の友人の若いロシア人医者に診てもらい、お互いを看護しなければならなかった。この若い医者はクロウバラにあるホテルで療養するお金を貸してくれた。回復するにつれて、我々二人はヒースの生い茂る荒野を越えて近隣の村まで散歩に出掛けた。それは私にとっては初めての南イングランドの片田舎の景色であり、すぐにその景色に惚れ込んだ。ホテルの居間で我々は上品でおっとりした老婦人たちといっしょに話をした。彼女たちは私のスコットランド人の目には未知の奇妙な種族よりもいっそう奇妙にみえた。これら老婦人たちは私の知っているスコットランドの老婦人たちのように、自分で決定するのではなく、奇妙で秘教的な男性の仕切る過程によって決定してもらっているようにみえた。一人のとてつもなく冷静でハンサムな青年が老婦人たちの中にいて、老婦人の一人に付いていた。ホテルを立ち去る前日の朝、彼はいきなり我々に話しかけてきて――居間には我々以外にだれもいなかった――永遠の生命の秘密を発見したと言った。彼の説明によると、生存というのは終わりのない輪であって、この輪は何かの破壊的な事故によって壊れてしまったという。そこで必要なのは、壊れた輪の先端を見つけ、それらを繋ぎ合わせることである。こうするには自己生存のバランスをとるように、つまり永遠に続く、生きた血行停止を生じさせるように身体の化学的作用をコントロールすることである。彼は数年間自分の身体で実験を続け、この状態に到達していた。我々二人が深く感動するほど彼の表情や泰然自若たる物腰はさながら神の如くであり、そしてそこには落ち着き払った自信が満ち溢れていた。それは希有な出会いであったが、以来彼がどうなったかと考えることがときどきある。我々は住所を交換し、手紙を書くことを約束したが、決して書くことはなかった。そして今では彼の名前さえ忘れてしまった。

ロンドンに来てから、我々はときどきオレージに会うようになった。クロウバラから戻ってくると、オレージは『ザ・ニュー・エイジ』の彼のアシスタントの職を私に提供してくれた。給料は僅かだったが、仕事は週三日を越えることはなかっ

た。それゆえ、余分な仕事を捜す時間が持てた。だいたい同じ時期にウエスト・エンドにある大きな店がウィラを女子従業員たちの補習学校の校長にしてくれた。校長の職は私の給料より良かったし、私は『ザ・スコッツマン』(*The Scotsman*)の演劇評論家としての仕事もあり、当時ジョン・ミドルトン・マリー(J.M. Murry 一八八九―一九五七　英国の文芸評論家。ロマン主義詩人や D.H.ロレンスを擁護した＝訳者註)が編集していた『ザ・アシニーアム』（*The Athenaeun*）の評論の仕事もときどきあったので、我々は比較的裕福であった。これでいつかよくなるというウィラの希望が間違っていなかったことが十分証明された。我々は一所懸命働いたが、興味ある仕事に就いていた。そしてますます多くの人に出会うようになり、ここかしこに知人がいることを知った。自分が場違いな所にいるという感覚が次第に薄れ、私の恐れもそれほど頻繁に襲って来ることがなくなった。

ロンドンに適応しようとしたが、ロンドンに来てから間もなく起こったある出来事によってすんなりとはいかなくなった。『ザ・ニュー・エイジ』は以前から精神分析に関する記事を載せ、その中でフロイトやユングの理論も科学だけでなく哲学、宗教、文学といったあらゆる角度から議論されていた。無意識の概念は人間のあらゆる問題に新たな光を投げかけ、また精神分析の用語を変えるようにも思われた。ヒュー・キングズミル(H. Kingsmill 一八八九―一九四九　英国の小説家、伝記作者、批評家、編集者＝訳者註）の言葉を使えば、ぬか喜びをする人たちは、私もその一人だったが、認識の世界全体を変えることになる啓示としてこれに飛びついた。オレージ自身は、後になってそれは人を惑わす道だとみなすようになったが、当時はそれにとても興味を示していた。彼は私が良好な状態でないことを知り、彼の特徴である積極的な情け深さと外交的手腕で私のことをある精神分析医に話をした。分析医は優秀かつ魅力的な人物で、ある晩会いに来るようにと私を誘ってくれた。私は自分のためになるたくらみを怪しむことなく、彼のところへ行った。そして温かく迎えられたが、それからショックを受けるようなあけすけな質問をいくつか受けた。最後にその分析医は、単なる好奇心から、また診察料もなしで、私を精神分析してみたいと言った。恐れが相当長い間私を苦しめてきたにもかかわらず、私は、この分析医が自ら進んで提供してくれる助けを必要としている神経症患者であることを認めてはいなかったが、私はこれまで精神分析に関する本をたくさん読んできたし、また実験そのものにも興味があったので、承諾することにした。以来承諾してよかったと思っているし、分析医の親切な行為にも常に感謝している。

その後の数か月はとても苦しかった。精神分析を受けた他の人の経験が私の経験と同じかどうかはわからないが、たぶん私の抵抗は大半の人より激しかったであろう。それゆえ、私の不快症状はいっそう強くなったのかもしれない。深まりつつある私の新たな自己認識はその抵抗に大きな穴や切れ目をつくりながら、その抵抗をうち壊さねばならなかったが、一方で私は必死になってこの穴や切れ目を塞ぎ、これまでの実物以上によくみせようとする自分自身のイメージをそのまま保持しようとした。私の意識的精神はこの戦いに挑んでいたが、無意識の精神は、裏切り者のスパイのように、分析医のために熱心に働いていた。私は長い間夢をみなかった。毎夜ハイネの死人のように、まったく実在しない者のごとく寝ていた。私の墓をノックする亡霊もいなかった。だが夢はまた群れをなして押し掛けてき始め、毎夜数え切れないほどの夢をみた。分析医にもっていくために夢を書き留めたノートはすぐに埋まり、別なノートに書き始めなければならなかった。私のサイキの創造力には際限がないようであった。だが、分析医がこれらの夢を解釈し始めると、私はまた抵抗を感じ始めた。夢のいかがわしい意味を認めるのを拒否するか、懐疑的な笑みを浮かべて同意した。しかし彼のもとを立ち去った後、私は自分に嫌気がさし、また自分に恐れをなして身震いした。ついに、辛い段階を経て、違う言葉で理路整然と述べられたが、罪の確信に似た状態に達した。だれもが、私と同様、性的な欲望や考え、自己嫌悪や他者嫌悪を引き起こす不承知の失敗や挫折、耐えられないがためにずっと以前に心の奥底に抛り込んだ恥辱や悲嘆の忘れられた記憶などに悩まされるという基本的な事実を理解した。私の運命が人間の運命であり、またありのままの自分の姿に直面したとき、自分も同じ欲望と考え、同じ失敗と挫折、同じ不承知の自己嫌悪や他者嫌悪、同じ秘密の恥辱や悲嘆をもった人たちの一人であり、そしてそうしたものに立ち向かっていけば、ある程度そこから解放されるということを知った。それは実際罪の確信だったが、それ以上に、原罪の認識であった。こういうことが明らかになるには長い時間がかかったが、これは歓迎すべき認識ではなかった。というのは、自分自身を見つめることほど難しいことはないからだ。私のものの考え方の全体的な世界が、目につかないが、変わったのだ。私に忠実につき従ってきた超人は、十字架上に姿を現した後、一言も言わずに突然立ち去ってしまった。そして私は完全に分析された人間を超人とみることさえできなかった。私自身の分析は終わることはなかったが、妻と私がロンドンを去

ったので、中断せざるを得なかった。分析医が私にとってどれほど有益だったかを知ったのは九か月後のことで、我々がプラハに滞在していたときのことであった。ある日、私の漠然とした恐れが消えていたのに気づいたのである。

精神分析はとても辛かった。特に最初の数か月は辛かった。夢の中から多くのものがどんどんと噴出してきた。そして噴出してきたものに直面しようと努力したが、それが神経と道徳心へのストレスを長引かせることになった。私は奇妙な精神状態に陥っていた。白日夢や幻想を見たりした。私の無意識の心は、荷を降ろして、透明になったようだった。それゆえ、神話や伝説が何の抵抗もなくその中に入り込み、私の夢や白日夢の中に入ってきた。こうしたことは精神分析を始めた数週間後に起こった。またこうなったのも、もとはといえば、自分が何か病気に罹ったのではないかという気持ちがあったからなのだが、こういうことがまた白日夢の中に入り込んで来たのである。

ある日の夕刻、仕事を終えて六時に帰宅したが、気分がすぐれなかった。居間のソファに顔を壁の方に向けて横になった。ウィラは予備校の試験の答案を訂正しながら、私の後のテーブルに座っていた。ウィラが答案をめくるときのさらさらいう音に耳を傾けていたが、その音は部屋の中で妙に大きくなっていくように思えた。それから私の呼吸も次第に高鳴り――こういう言い方しかできないが――同時に、まるで呼吸せざるを得なかったからではなく、呼吸するぞと意図して呼吸していたかのように、ゆっくりであった。これは呼吸の最初の行為、あるいは呼吸のリハーサルのようだった。私は胸が上下するのを感じたし、また自分が払い除けては引き戻している何ものかが胸に圧迫を加えているのを感じた。これが海水の寄せては返す大きな紺碧の波に変わっていった。紺碧の海の景色が目の前の灯りがともった壁に開けた。紺碧の空が壁の上に弓なりにかぶさっていた。自分が身体からするりと抜け出したかのように、寄せてくる波を見ながら岸辺に立っていた。岸辺から少し離れたところに裸の女性が配置されていた。波は彼女に勢いよくぶつかり、彼女の胸まで打ち寄せ、そして引いていった。しかし彼女は微動だにしなかった。彼女はどこか別次元から出現してきた彫像のように、そこに据え付けられているようであった。

その後、すべてが消え、私は海底にいた。はるか頭上では波が揺れていた。再び浮かび上がって来たとき――この間ずっと私は背後から聞こえる紙のさらさらいう音に耳を傾けながらソファに横たわっていた――海と空は紙のように真っ白だった。遠くでいくつかの黒くギザギザに尖った岩が淀んだ水から突き出ていた。黒と白以外に色はどこにもなかった。私はものすごい速さで(この時はまだ泳げなかった)一番近い岩に向かって泳ぎ始めた。周辺では無数の生き物が白い海の中で透明な色に染まって旋回したり、飛び込んだりしていた。頭や尻尾、口や目もない人間の大きさの円筒形のものたち。私は岩に到着し、自分を引き上げようと片手を差し出した。そのとき、これらの生き物の一種が、吸盤がついているようにみえる上方の先端を使って私の両目の真上の額の真ん中に身体を据え付けてきた。私は怒り狂って、その生き物を裸足のつま先で蹴った。徹底的に蹴り飛ばしたら、その生き物は壊れた瓶のように海に沈んでいった。この間まったく怖いとは思わなかった。私は自分の身を岩の天辺に引き寄せた。

その後しばらくの間は、夢の記憶は断片的である。夢は断片的ではなく、連続したものだったにちがいないが、夢の場面がもの凄い速さで次から次へと展開していったので、そのすべてを記憶に留めておくことができなかったのである。次に覚えているのは、小さな茶色の岩が点在していた未開の森林地帯をさまよっていた夢である。森林地帯にはやや猿に似た額の狭い、金髪の無言の生き物の群れがいた。そして遠くでは、白いローブを纏った女性の行列がまるで沈黙の音楽へ向かってゆくように、ゆっくりと通過していった。私は長い間そこをあちこち歩き回っていたように思えた。倒れた木の緑色の苔むした幹と思しき所に来たことを覚えている。よく見るとそれは竜であった。竜は涙を落とすように、目をゆっくり落とし、目の前に小さな目の山ができた。その目は青色、赤色、白色の輪がついた、硬くて釉薬を塗ったブローチのようだった。それゆえ、目が落ちるとき、チリンチリンと音がした。こうしたことはすべて私にとってはごく自然なことのように思えた。落ちて来る両目は、後の他の目に押し出されて来るように思えた。

ここで夢は再び途切れた。次の光景はまったく違っていた。私は木も灌木もない荒涼とした岩場にいた。そしてその岩場の真ん中にある壮大な白亜の宮殿に来た。壁は高く窓がなかった。そして小さな戸口がひとつだけあった。私はそこに近づき押し開けた。戸口はすぐに開いたが、手を離したらまた閉まり、二度と開かなかった。それから戸口のすぐ側におよそ三フィート平方の小さな穴をみた。そこを潜って、大きなホールのバルコニーへと歩いて行った。見上げると、はるか頭上に屋根を見ることができた。下を見ると、ホールは目で追うことができないほどはるか遠くにあって、地中に深く沈んでいるようだった。この下方の部分は木製の足場で被われており、作業員の姿は見

えなかったが、明らかに修理中だった。そこは長い間見捨てられて、寂れ果てていた。私は手すりに登り、両手を頭上に上げ、飛び込んだ。かなりの距離を真っ逆さまに落ちていったが、手が足場のひとつの梁を掴み、猿のように梁を手繰りながらすいすいと猛烈なスピードで再び上に登り始めた。頭が天井に触れ、これ以上行けなくなるまで登り続けた。再び私は怒りで一杯になった。分厚くて立派な鋳造物で飾られた天井に頭をぶっつけ、それを壊してしまったのだ。頭上には、イトスギが植え込まれた広々としたテラスがあった。夜のとばりが降り、紺碧の空には星々がきらきらと輝いていた。ローブを纏った背の高い男たちが木々の下のテラスを、やや大げさに威厳をもって歩いていた。

ここでまた夢は途切れ、再び夢をみたとき、私はイグサで縁取られた山の小さな水溜まりの側に立っていた。空は、日の出前はときどきそうなるのだが、打撲傷のような淡い赤紫の色合いだった。空を見ていると、紙切れのような二つの小さな雲がお互いの方に向かってゆっくりと浮動していた。そしてそのとき、なぜだかわからないが、はじめて怖いと感じた。その二つの雲は合わさり、ぱっと燃え上がり、怒れる太陽に変わった。太陽は空を回転し始めた。太陽が回転していると、二匹のヘビが、一匹は赤色で、もう一匹は黄色だが、太陽の外殻を突き破り、激しい取っ組み合いの戦いを始めた。太陽は、さらに回転し続け、戦っているヘビを巻き込みながら、急にぱっと燃え上がり、たちまち灰と化してしまった。黒くなった太陽は紙のように白い空を旋回し続けた。その後旋回は止んだが、その周辺が小刻みに震え出した。そして太陽はムカデのような脚を持ち、クモのように見えない糸の上を歩きながら、はす向かいから私の方に近づいてきた。近づくにつれ、それが、身体を甲冑で武装し、帆船のへさきにやや似た頭で、一部は女性の、一部は鳥の頭をした伝説上の生き物であることがわかった。その身体は真ん中で結合していて、一頭の亀がもう一頭の亀の上に乗っかっている巨大な二頭の亀のようにみえた。私は自分が裸で、両手で幅広い剣をもっているのに気づき、剣を持ち上げ、肩の上でそれを振り回し、その生き物の額を打ちつけた。しかし、その生き物には何の変化もなかった。それでもう一度剣を持ち上げ、さらに強く打ちつけたが、生き物は頭をそらすだけだった。激怒して今度は甲冑が結合している脇腹を突き刺したが、その生き物は振り向いて、私に向かってにっこり笑った。これで私の怒りは頂点に達した。剣をぐるぐるとねじり回した。鎖帷子が突然ぱっと裂けた。白色のローブを纏い、白色の翼をもったものがぱたぱたと空へ飛び立っていった。そしてその生き物は傘を閉じるように、裂けた鎖帷子を身の周りに引き寄せ、嘴を地中に突き刺し、ぱっと姿を消してしまった。

またここで、長くはなかったが、中断があったと思う。次に覚えている夢は、無数の天使が空中高く飛んだり、滑稽ではあるが美しい旋回運動をしたり、宙返りをしたり、雲の端に隠れたりしていた。空全体が無数の天使で満たされていたが、私は天使たちが静かなで広々とした水域の上空を整然と編隊飛行しているのをじっとみていた。そして、天使たちが私の頭上を通過していったとき、水に映った天使の姿をみることができた。その後、私は空中にいた。少し遠くの上空にいたとき、誰かが私の手を掴んだ。それは私の妻であった。我々はときどき飛び上がったり、軽快にあちこち広範囲にさっと一飛びしながら、空中で大袈裟にひざを曲げてお辞儀をしたり、翼を静止させたりした。しばらくして、彼女のすぐそばの肩の翼が落下してしまっているのに気づいたが、彼女を見ていたら、翼をなくした肩のすぐそばの彼女の肩の翼もなくなっていた。そこで我々は二つの翼で空中を舞い上がっていった。しばらくこうして飛んでいたが、その後下をみると、大群衆が同心円状に並んでいた。そしてその真ん中に古式ゆかしき鎖帷子を纏った巨大な人物が脇に抜き身の剣を置いて玉座に座していた。我々は彼の肩に舞い降り、彼の首筋の背後で身を折り曲げ、キスをした。

この白日夢、夢想、あるいは幻想が終わったとき、私は気分が大分よくなり、吐き気もすっかり治ってしまった。この夢のことを話すと、ウィラは驚いていた。夢について長時間話し合った。それから他の夢といっしょにこれらの夢をノートに書き留めた。翌日は分析医のところに行く日で、ノートを彼に手渡した。長い沈黙が続いた。とうとう私はそれらの夢をどう考えますかと訊ねた。そしてこの間、ランプの明かりや紙のさらさらいう音を意識しながら、ずっと目を覚ましていたことを伝えた。彼はこの夢が天地創造の神話ではないかみたいなことを言っていた。そして私の無意識があまりにも意識の表面に近づきすぎているので、私の安らぎや安全を確保できなくなるし、また急いで私自身と無意識の間に架空なものではなく、何か実質的なものを置くべきだと警告してくれた。この忠告はもっともだったが、私には少しも役に立たなかった。自分に対する緩和剤として即席で作れるものを思いつかなかったし、寿命を少しでも延ばすようにと言われたほうがましであった。私がためらいながら、その夢は霊魂不滅のことを示しているのではないかと言い、「ああ、そう考えれば君の虚栄心は満足するだろうね。啓示が君のために特別に用意されていたのだと考える

のはいいことだよ」と彼が応酬した後、夢は分析しないほうがいいということで意見が一致した。そして彼はその夢には性の象徴的意味があるのではないかと言ったが、そのときまでには私はその意味を自分の力で読み取ることができていた。管状の動物、両手で使う剣、目を落としていた竜。だが、こうしたものは、はっきりと見えたものだが、この世的でも人間的でもない、従ってある意味では性的でもない夢に適用できるとは思えなかった。私は夢の場面がどんなに生き生きしていて、素早く展開していったか、実際の生活や詩に見出せるどんな場面よりもどんなに自分をうきうきさせてくれたか、そして各場面の詳細が次の場面の中に瞬時に消えていく前に完結していたかなどを彼に伝えようとした。夢がどのくらい長く続いたか彼に言うことはできなかった。三十分だったかもしれないし、たったの数分だったかもしれないが、その夢を言葉で言い表すのに要する時間よりもはるかに短かったように感じた。

その後、我々はその夢や私がその夢を見た奇妙な状況のことは議論しないことに決めたのだが、この決定は分析の後の段階でしたほうが適切だったかもしれない。それ以降も、特に眠りに入ろうとするときに、同じような夢や白日夢が続いたからである。とは言え、数は多くなかった。夢を意のままに停止させたり、続行させたりできることがすぐにわかったからだ。半ば目覚めた状態でみたそうした夢の一つが次のような夢である。私は赤いビロードが垂れ下がり、クッション付きの座席が壁の周囲を走っている狭い円形の部屋にいた。部屋が狭いのと、赤色の掛け物や家具など、すべてが赤色だったので、私は恐ろしいほどの圧迫感に苛まれた。しかし、一番困ったのは、まったく孤独で、しかもとても高いところにいたことだった。どうやってそこへおびき寄せられたのかわからないが、何か妙な策略や謀反が仕組まれていた。突然、自分が知っているすべての人々から何百万マイルも離れた星にいて、円形の部屋は実はその星の内部であることを知った。部屋は狭く、とくに家具は圧迫を感じるほど優雅で柔らかく、さらにクッション壁の個室も柔らかかったので、息もつけないくらいの恐ろしさと打ち捨てられた孤独感に満たされた。だが、最悪だったのは、高いところにいるという恐ろしいほどの感覚だった。私は壁を捜した。そしてついに小さな窓をみた。それはまるで私の救いのようだった。窓の方へ行き、窓を開けた。それから窓敷居まで登っていき、下を見た。はるか下方に、微かに光輝いている小さな雲の堤をみることができた。この雲の堤の向こう側には地球があることを知った。下へ降りていきたいという抵抗できない気持ちが私を襲った。私は両手を頭上にあげて飛び込んだ。この後のことは、雲を突っ切って進み、はるか下方に地球の一側面がみえてくるまで、何も覚えていない。それが全面氷に被われた大きな灰色の球体であることを知った。この球体に近づいていってはじめて、落下して自分が粉々に砕けてしまうことを知った。これをみて私の魂は身体から飛び出し、私の身体が落下していくのをみながら、地上よりちょっと上の空中に浮いていた。身体が氷にあたって、打ち砕かれてばらばらになるのを見ていた。私はやや可哀そうだと思いながらも、客観的にみていた。怖いという気持ちはなかった。しばらくして、セイウチにやや似ているが、それよりもかなり大きい、黒くてすべすべした皮膚の動物が氷の穴から出てきて、私の身体に近づき、臭いをかいだ。この大きな動物は優しく悲しそうな顔をしていたが、身体の臭いをかいだ後、何のこだわりもなくぱくぱく食べ、また穴の中に入ってしまった。私は空中に浮いたままじっと待っていた。何かが起こるのを知っていたからだ。しばらくすると、私は生まれ変わり、太陽の色をした一匹のヘビを胸に巻きつけ、その頭を肩にのせて、穴から出てきた。私がずっと歩いていくと、新緑の草が私の足下や両側に生えてきた。

最初の夢もそうだが、もしこの夢が私に「現れた」のではなく(あのときこの夢は私に現れたと思ったし、今もそう思っている)、私がこの夢を作り上げたというのであれば、その夢はまったくの霊的虚栄によるものと考えなければならないことは承知しているが、夢をみたのは「私」ではなく、心理学者の言う人種的無意識(他の名称もある)であった。他にも夢をみたが、その夢のいくつかはそれほど心地よいものではなかった。そのひとつは次のような夢である。私は北極あたりで他の二人の男たちと原始的な船に乗っていた。そして我々は、半分は魚で、半分が動物のグロテスクで荒れ狂っている海獣をかわそうとしていた。私は扱いにくい櫂でその海獣を打ちつけたが、海獣は櫂に噛みつき、それを引っ張った。この時点で怖いと思ったとたん、夢は消えた。最後の場面は、原始的な船と巨大な海獣と戦うのに両手以外に何の武器ももたずにその船に乗っている我々三人であった。

もうひとつの白日夢は、単なる場面だけだったが、さらに恐ろしいものだった。私は山国の小道の入口に立っていた。そして一団の男たちも私の周りに立っていた。私は武器をもっていなかったが、一団の男たちは武器をもち、顔には哀れみの表情など一切なかった。夕日は沈もうとしていた。槍は赤く輝いた。そしてこれが私の最期の時だということを知った。

こうしたすべての白日夢を分析医のところにもっていった。彼は私にますます関心をもつようになった。私は再び夢を続けさせることもできるし、停止させることもできると言い、どうしたらいいか彼に助言を求めた。彼は夢を停止させるよう強く勧めてくれた。私はその通りにした。私の白日夢は直ちに止み、決して再び現れることはなかった。夢を停止させたことが正しかったかどうか今は疑問に思っている。夢を続けさせても、夢は私自身の時期ではなく、夢そのものの時期が来れば、自然と止んだのではないかと思う。他方、私はこの段階で正気と狂気の境界に近いところにいたのかもしれないが、一瞬たりともそれを信じてはいない。分析医は私の心の健康を心配し、私を、それがどんなものであれ、正常な状態に戻そうとしたが、彼が他にどんな忠告を私に与えることができたか私にはわからない。

当時、この神話的夢にどう対処したらいいかわからなかったし、今もわからない。この白日夢を詩に利用したが、詩においてはこのような経験からはたいした結果は出ないようだ。分析医は白日夢には決して戻らなかったが、その夢が天地創造の神話だという彼の理論に私は満足していない。というのは、夢の最初の部分は、最初の大きな息づかいや未分化の生き物など物の原初や恐怖心の欠如（あたかも意識やそれと共に恐怖心が始まっていなかったかのように）を示しているが、最後の部分はまったく時間を超越しているからだ。旋回する太陽（この太陽は回転軌道のすべてを回った後スフィンクスになる）との戦いは、時間との最後の戦いである。その戦いの後、時間は裂かれた鎖帷子を身の周りに寄せ集め、永遠に自分を待つ墓場へと消えてしまい、霊魂を永遠の中に解き放すのである。この夢に一つのはっきりしたパターンが流れていることは確かだが、しいて言えば、それは天地創造のパターンではなく、人間の進化や究極的運命のパターンである。その夢は全体として我々の始まりと終わりを扱っているのだ。とはいえ、この夢には意味がはっきりしないところもある。半地階と半地下の宮殿のエピソードなどは私には理解できない。回転し変化する太陽は時間の見事なイメージである。おそらく、それゆえ最初に太陽が現れたとき、最初に私は恐怖心に襲われたのだ。頭も目もない海の生き物の中を、まるで自分もその一人であるがごとく恐れることなく泳ぐことができるほど人間の意識から遠く離れていたときにみた最初の方に出てくる女性、あるいは女性の像は、一千年先のもののように思えたし、遠い未来の予言のようにも思えた。それはまるで人類が存在するはるか以前の動物の魂がそれを夢みているようであったし、またそれを憧れているようでもあった。私が金髪の動物の間をさまよっていたときに、白いローブを身につけ遠くを通過していった女性たちの姿も同様の神秘的で予言的な雰囲気をもっていた。高所から身を投げ出したい（二つの夢の中に出て来る）という気持ちは、直接的には地上に降りて現実を受け入れなさいという分析医の熱心な勧告と関係しているが、それは人間の堕落、最初の受肉、アダムの最初の受肉のイメージを思い出させてくれるし、また天国から落下している不動の梁と、拒否してか服従してか、知ってか知らずか、天国にまみえんと切望し、絶えず上昇していく塵が交わったものとしての、またこの二つが渾然一体となったものとしての時間のない人生の私のイメージを思い出させてくれる。

そして一人の男がその下に
生涯ずっと立っている。

私がもっと信じやすかったら、もっと信仰心をもっていたら、あるいはもっと知識をもっていたら、人間は、この地球上に出現するずっと以前に、動物の魂の中に一つの夢として、あるいは一つの予言として存在していたという直感を一つの真実として受け入れたであろう。だが、私はそれほど信じやすくも信仰心も知識もなかったので、確かにこの白日夢を真理の啓示として受け入れる意味はあるのだが、異なる種類の経験を扱うことに慣れ、しかもその経験にしか適していない私の理性は、不可解なものや矛盾や回想録を見出しては、一つ一つの細事に疑問をもつのである。甲冑を身に着け、抜き身の剣を脇において玉座に座していた人物は明らかに戦いの神であるヤーウェであったし、天使は、自由奔放さをとことん表現しながら、気ままに、また神々しくも軽薄に振る舞っていたことを除けば、クリスマス・カレンダーに出て来る決まりきった天使であった。これらの天使は天使の固定観念と合致しており、それによって天使は非現実的なものになるどころか、一層納得のいくものとなり、人々が度々読んで知っている、また論争の種となる、さらには自分の目でみている稀有なものの現実性を帯びたものとなっている。一方、竜とスフィンクスは完全に自分が作り出したもののようであった。私の知る限り、テーマが頭の中にあって、それに基づいて作り出したものではなかった。そして夢の全体的な雰囲気は奇妙で驚くべきものだった。爽快でスピードがあったし、どこからみても華麗であった。何より、そこには人間的なという言葉が意味するものが一切なかった。

この夢をみたとき、私はすでにニーチェかぶれ

から脱却していた。そして霊魂不滅をある時期この世の生活や直接的知覚の純粋性を非難するものとして退けた後、再びためらいながら信じ始めた。それゆえ、その夢によって、私は霊魂不滅信奉者になることはなかったが、霊魂不滅信仰はかなり強化され、同時にその信仰に修正が加えられた。私の新たな友人ジョン・ホームズ(John F. Holms 一八九七—一九三四 インド生まれの英国の評論家=訳者註)の手紙で、この時期の私の精神状態がいくらか明らかにされている。ホームズは私と初めて会ったときの様子をヒュー・キングズミルに伝えていた。我々は、一九一九年の夏のある日曜日の朝、グラスゴーで、私がちょうどグラスゴー近郊の田舎へ散歩に出掛けようとしていたときに初めて会った。旧知のヒュー・キングズミルがホームズを私に合わせてくれたのだが、その後、キングズミルはブリッジ・オブ・アランに立たねばならなかった。ホームズは次のように書いた。

老ミュアと楽しい午後を過ごした。我々はほとんどの時間絶え間なく・・・形而上学について語りながら、二時から九時までグラスゴー近郊の田舎を歩き回った。もちろん、彼の見方は全体的にまったくニーチェ——ほかには誰もいない——の哲学に則ったものだった。彼はやや視野が狭いが、だれも気にならないほど強烈にそれがすべてだと彼は思っている。

悲劇的な見方とか不幸から得た幸福などについて話しながら、彼のひどく不幸な生活のゆえに、ミュアは自分がやることを信じようとしたのかもしれないことを認めていたが、もちろん、それを完全に真実だとする W. ジェイムズ(W. James 一八四二—一九一〇 米国の心理学者、哲学者。『宗教的経験の諸相』、『心理学原理』、『根本的経験論』などの著書がある=訳者註)の『信じる意志』の線に沿って、自分を正当化していた。それに関して実に興味深いのは——たぶんあなたも聞いていると思うが——彼が極めて信心深い人たちに育てられ、また十四歳のときに「救われ」、かなりヒステリックだったが、完全に純粋な陶酔を数週間経験したということである。その要点は自分の意志をキリストに委ねること、つまり、自分自身の個性と責任を否定することである。ところで、美はこの時期の彼にはまったく影響を与えなかった。そして次の二年間はますます不愉快な歳月で、是が非でも得ようとしたのではない、本質的に人為的な刺激にすぎなかった陶酔は次第に消えていったし、また不自然な生活と精神的なものについての考え方が彼を衰弱させた。その後ニーチェ(彼はニーチェを通読していた)が来て、当然の結果をもたらした。今あの「救い」の時を振り返ると、彼は本当にむかつくほど嫌な気持ちになり、これまで度々歩いてきたグラスゴー近郊の田舎を歩くことさえしない。私もああいったことにはまったく直観的に嫌悪を感じるが、それを経験によってはっきり確認するのはことのほか興味深いことだ。もちろん、その結果、どんなであれ、神秘主義というと、彼はいら立ちを覚えるのである。美とかそれ以外のいかなるものとの一体化は、彼にはどんなにしても無理であろう。それは彼の人格を捨てることを意味するからだ。彼はすべての神秘家の幻想の中心にある合一よりもニーチェの永劫回帰とか憧れ(この代わりとなるものは、美に感動した時の人々の——とにかく、私の——とても深い感情である)のほうがずっと好きなのだ。二つの陶酔はもちろん天と地獄ほども違う。そしてとりわけ明白な違いは美感である。一方の陶酔にはそれが欠けているが、真の神秘家の一言一句にはそれが暗示されている。最初の陶酔ではすべての努力を放棄して合一へ辿り着こうとしている——これは早産の試みというものである——が、いまわしいこの世では合一とは、他のすべてのことと同様、完全な表現に達しようと努力しつつ、極度の緊張の中で全エネルギーを使って初めて獲得されるものなのだ。そしてキリストを含めたすべての神秘家によれば、最高の高みに達した個々人の自己表現と宇宙との合一は同一である。エネルギーこそが安息への王道である。

エドウィン・ミュアについては彼の人生からだけでなく、彼の民族性からも説明できる。ミュアは美を通して深い感情を経験したことはないと思う——彼は詩をほとんど読んでいない。彼の民族の気質は道徳的であり、形而上学的である。形而上学的観点から宇宙や道徳的な問題に関心をもたない作家には見向きもしないようだ。例えば、スウィフト(J. Swift 一六六七—一七四五 アイルランド生まれの英国の風刺作家。著書に『ガリバー旅行記』、『書物合戦』、『桶物語』などがある=訳者註)だが、最初は肩をすくめていたが、その後渋々認めるようになった。ペイター(W. Pater 一八三九—九四 英国の評論家、小説家。著書に『ルネサンス』、『享楽主義者マリウス』、『想像の肖像』などがある=訳者註)を嫌っていたが、それには驚いた。それもペイターが美にしか関心がなく、ミュアは人生から美を吸収しようとしなかったからにすぎない。

それはことのほか美しい夕暮れだった。風もなく、垣根はバラで被われ、灼熱は遠くの谷間で揺れていた。…私は子どものときはこれほど度々またこれほど長時間心の底から感激したこ

とはなかったが、ミュアは感激するということはほとんどないかもしれない。ミュアは自分を激励し、体を張って相手と戦う荒れ狂う疾風を望んだ。こういったタイプの精神にとっては極めて明らかなのだが、安息とか美との合一としての絶対という考えは退屈なものでしかない。ウィリアム・ジェイムズも、ある点までは鋭い知性の持ち主なのだが、同様である。可能な限り広い意味で解釈される絶対に対する私自身の信仰はかなりぐらついているが、我々が現在知っている人格は存在しなくなるとほぼ確信している。ミュアは絶対をただ彼の知力だけで理解している、つまり、人が絶対を説明しようとするときの言葉によって理解しているだけである。言うまでもなく、そんなことは不可能である。論理的には、私もまた、他の人と同様、あれこれと絶対をこきおろすことができる。

…霊魂不滅に関する自分の見方は定まってはいないが、人格は永遠に生き残ると信じたいと彼は言った。これを聞いてぞっとしたし、また幸運にも、ばかばかしいとも思った。しかもそう思ったのは「信じない」意志からだけではない。

私は彼とあなたとの中間点にいる。私は形而上学も色々学んだが、シェイクスピアやラブレーもたくさん読んでいる。また女性についてあの老人に忌憚なく話すのはとてもできないことがわかった。一度か二度女性を話題にのせたことがあったが、表面では共感していたようだが、実際はまったく違う考えの世界にいた。

これはグラスゴーでの最後の年の私を描写した真実の姿だと思う。私自身が描くことができたかもしれないものより優れた描写となっている。私は当時知ることができなかったが、ホームズはニーチェの思想に対する私の信仰が意図的な信仰であり、また途方もない苦境に対して自分を守ろうとする戦いの中で、人格が私のなくてはならない最後の砦となっていたことを知っていた。私は、自分の信仰を、ぞっとすることに、人格の不滅信仰や不滅願望にまで推し進めていたことを知らなかった。人生から美すら吸収していないとホームズは言ったが、その言葉によって、私の生存競争が思っていたより辛かったことがわかる。その結果、ホームズが言っている合一なるものは、おそらく、私にとっては降服することに思えたし、またせいぜい年をとって、背を丸くした事務員にしかなれないこの世を不名誉にも受け入れることのようにも思えた。十四歳のときから私の人生は苦闘であり、その苦闘の中で自分を弱めたり、そうみえたりするものはどんなものであれ受け入れることはできなかった。何であれ、何かとの合一というのは私にとっては確かに一種の裏切りのように思えた。ここでまたあの憧れと恐れの混じり合った感情が、この世を受け入れれば、弱さではなく強さと信仰が得られることを私に隠しながら、襲ってきた。私の人格不滅信仰は、意思の投影にすぎなかったし、また「人が絶対を説明しようとするときの言葉」（ホームズが言ったように、そんなことは不可能である）だけの、想像力に溢れた中身を持たない観念にすぎなかったのである。

私の白日夢は、私の人格が少なくとも、もし不滅というのが地獄の別名でなければ、不滅ではない、不滅であるはずがないことを暗示してくれた。私が時間と協力して築き上げた二流の脆くも崩れそうな構造物を超越した、私の中で永続するものを考えようとしたとき、時間の中に対応物がある形式やものの観点からそれを考えることはできなかった。時間の中では形式やものは分離と束縛の同意語であり、魂が懸命に求めているもの、また魂がつくられている目的は無限な合一と自由である。霊魂不滅というのは一つの概念や信仰ではなく、人がこの無限な合一と自由を自分の中で生き生きと認識している状態であることがわかった。もっとも、その完成した姿は時間を超えたところにあるので、時間の中ではかすかにしか捉えられないが。人生はこの世で充足するのではなく、永遠まで続いていくのだという認識は、数年前だったら、人間のこの世での希望への裏切り行為として拒否したであろうが、今では、違って意味で、その希望を確証するものとなっている。というのは、不滅なる霊魂をもっている種族のみが不滅なる霊魂が住むにふさわしい世界をつくることができるからだ。これは、もちろん、単純化の単純化であるが、「宗教は大衆の阿片である」とか、究極の合一と自由に対する我々の希望は、人間の社会において合一と自由を成し遂げる具体的な可能性を遠ざけてしまう幻想にすぎないといったとてつもない単純化から私を救ってくれた。魂は不滅だという説は、富裕層を不安にさせない口実として発明されたのではないし、また十九世紀末や二十世紀初期の階級意識をもった労働者に向けた引用文を提供するために発明されたのでもなかった。

こういったことが明らかになりつつあったが、私は相変わらず『ザ・ニュー・エイジ』の仕事を続け、ニーチェばりの記事を書いていた。私とオレージとの関係は、当初はいくらかぎくしゃくしていたが、それは私のせいだった。グラスゴーでは私はいわば彼を尊敬するといった気持ちをもっていたが、この尊敬の気持ちは、私がロンドンに出て来たときに彼が大変親切に面倒をみてくれたために、さらに強まった。同時に、長期にわたる

生存競争によって頑なになっていた私の「人格」は、オレージに弟子入りするという考えそのものにたじろいだ。もっとも、弟子入りしようかと考えたのは、オレージをとても尊敬していたからだが、彼が年上で、経験や知識の点でも私より上であったし、また私が彼の助手をしていたということもあったかもしれない。彼は本来弟子たちを引きつける人間だったが、彼にとってその関係が慣れ親しい場合とうんざりという場合があった。もっとも、彼は礼儀正しかったので、辛抱強くその関係に耐えていた。しばらくの間は彼の弟子になったほうがよかったかもしれないが、私の「人格」が反抗したのだ。おそらく、私の抵抗にはありのままの自分でいようとする単なる決意以上のものがあったかもしれない。戦いというのはオレージとの戦いというより自分自身との戦いであった。弟子になりたいと思ったのも私であり、弟子になるという考えに反抗したのも私であった。オレージは異常なほど敏感な人であったので、自分に、あるいは自分についての見方に私が反感を持っていると感じつつも、私をどう扱ってよいかわからなかった。彼は手始めに私にいろいろと助言をしてくれたが、彼に対する私の姿勢がそれほど複雑でなかったならば、彼の助言はとても役立ったであろう。助言が受け入れられていないと知ると、彼は助言を控えるようになった。そしてそのことに私はいっそう失望した。彼の助言を無視したのは、私がまったく放心状態にあったからであるが、この放心状態というのはいわば頑なさの仮面なのである。ひるがえって、オレージは私の才能の本質を考慮に入れていないし、ましてや私の限界もわかっていないと感じた。彼は「今週のメモ」というコラムを私に書かせ、私を訓練したいと思ったのだ。このコラムは彼が 『ザ・ニュー・エイジ』を引き受けたときからほとんど休まずに書き続けてきたものである。オレージは自分がやるべきだと考えたことならどんなことでも自分でやることができた。彼はそういう力を手順よく訓練してきた。しかし、私はひとつのこと、つまり自分が考えたことを自分流に書くことしかできなかった。政治に対してもオレージのような強烈な関心はなかったし、真の政治的才能も持っていなかった。そして、これを機に、オレージの場合は、政治に対する関心をさらに身につけ、政治的才能を自分の内に作り上げるようになったにすぎなかったのかもしれないが、私の場合は、反対の効果しかなかった。もし譲歩したら、自分がもっている能力に忠実でなくなると考えたのだ。ついにオレージは「今週のメモ」というコラムを私に書かせることをあきらめ、文句も言わずに自分が書き続けたが、彼の私をみる目は困惑した、やや苛立った目であった。後に、フォンテーヌブローやアメリカでオレージがグルジエフ(G. Grudjieff 一八六六?――一九四九 アルメニア生まれ。一般に「ワーク」として知られる精神的、実存的取組みの主導者及び著述家、舞踏作家、作曲家として知られる=訳者註)に弟子入りして何年か過ごした後、彼に再会したが、そのときの我々の関係は以前よりはるかにスムーズで打ち解けたものだった。だが、彼を個人的に深く知ることは決してないと思った。

オレージは最も優れた座談の名士であったが、特に会話が議論になるかならないかの境目ではそうであった。彼は親友の一人イー(AE)(G.W. Russell 一八六七――一九三五 アイルランドの詩人、随筆家、ジャーナリストの筆名=訳者註)の抒情的想像力やヒュー・キングズミルの自然に湧き出て来る豊かな才能、さらにジョン・ホームズの直接見知した現実を持ち合わせていなかった。彼の頭脳は特に明晰でしなやかであり、ある対象の回りを流れ、それに触れて洗い、その輪郭を明示し、そしてそれに新たな明確さを付与することができた。彼は口ごもりながら言っている二言、三言から相手の言わんとする考えを見抜くことができたし、また彼の頭脳がまるで客観的で対象を明確にする装置でもあるかのように、たちまちその考えから不純物を取り除き、相手が見出すことができたかもしれない以上に適切な言葉で表現して、その考えを相手に返すことができた。その能力は並外れたものだったので、最初は面くらうほどであった。それはまるで新たな読心術のようであった。時にはオレージの仕立て直した考えが私の頭の中にある考えとはまったく違うこともあり、そのときには私は安心した。おそらく、実際にオレージの仕立て直した考えは、相手の考えと驚くほど近かったが、まったく同じということは決してなかった。彼は思想の生来の共同制作者であり、生来の助産婦、そして結果として、生来の編集者であった。彼はどんなことでも、つまらないことでも、深刻なことでも、共感して積極的に対処しようとした。彼がそれを考えてくれたというだけで、また彼の知性がそれに働きかけたというだけで、それはつまらないものではなくなり、理に適った談話に格上げされてしまうのであった。

一人の人間としてオレージは古風な美徳の持ち主として生きた。そして、プルターク(Plutarch 四六?――二〇?ギリシアの伝記作者、歴史家、道徳哲学者。『プルターク英雄伝』が有名=訳者註)の英雄のように、天賦の才に恵まれていたというより生活上の振舞いや天賦の才を明確に表明し、同時にそれを制御したがゆえに称えられた。その結果、彼の著作のように、彼の生活にも一つのスタイルが出来た。そしてそのスタイルは、自ずと明らかになってく

るのだが、人目に触れないように隠れてなされた意識的な鍛錬によって達成されたものであった。私と違って、彼は第一の考えが第二の考えの明確な表現へと導かれない限り、第一の考えに興味を持たなかった。そして、彼の生涯は彼の美徳や知識についての考え方を満足させ、さらに彼の好みに合うような第二の考えを、おそらく、第二の人格を見出すために費やされたように思われる。彼は人間の中に埋もれているイメージを意識的な鍛錬によって引き出す人間の能力を信じて疑わなかった。あるとき、もし自分に五歳の子どもが授けられたら、その子の「才能」がどうであれ、その子を天才に仕立ててみせると妻と私に言ったのを覚えている。彼は同じ信念をもって自分を処してきたし、若い時から知力や霊力への近道を与えてくれる信条をとり入れ、それを信奉してきた。彼は神智学協会の会員であり、イエーツ（W. B. Yeats 一八六五―一九三九　アイルランドの詩人、劇作家＝訳者註）も加入していた魔術サークルの一員で、ニーチェ信奉者であり、ヒンドゥ人の宗教と哲学の研究者でもあった。彼は名の知れた預言者や哲学者に与えられた知識の背後に秘めたる知識があると確信し、その知識やその知識がもたらす知力や霊力を獲得するため、すべてを犠牲にし、どんなに卑しくて疲れる、難解な仕事でも引き受ける覚悟があった。私が『ザ・ニュー・エイジ』を去ってから数か月後にこの雑誌を放棄し、フォンテーヌブローのグルジエフの指導の下に身を置いたのもこれゆえであった。当時私はプラハにいたが、私がロンドンにいなかったことをとても残念に思ったと書いてあった手紙を彼からもらった。というのは、ロンドンにいれば、私もあの注目すべき人物の話を聞いたかもしれなかったからだ。フォンテーヌブローの学校のことは伝聞でしか知らないが、数年後オレージに会ったときは、ちょっと若返り、やや機知に富んでいたことを除けば、以前のオレージと変わりはなかった。イギリスに戻った数か月後に始めた『ザ・ニュー・イングリッシュ・ウィークリー』（*The New English Weekly*）で、彼は再び政治問題を取り上げたが、今度は『ザ・ニュー・エイジ』のときのように、若い作家たちを彼の周辺に集めることはできなかった。彼にとって不可解である世代へ、すきのない時間哲学に凝り固まり、彼が生涯続けてきた精神的な戦いを受けつけないなど、彼が嫌ったある意味の政治的世代へ、今述べてきたようなことを「神秘主義」と称して拒否する世代へと戻っていった。

ロンドンでのこれら最初の数か月間、オレージは私と妻に、朝晩、五分か十分の間、「太陽より明るく、雪より純粋で、空気よりとらえ難いのが自己であり、心の中の霊魂である。私はその自己であり、その自己が私である」と唱えるように助言しながら、ヨガを始めさせようとした。妻はこの提案を皮肉と受け取ったが、私は必要な信念をもたずに、しばらくの間やってみようと思った。彼はまた毎日夜寝る前に犯した過ちや罪をすべて明確に、しかも腹を立てたり、気落ちしたりせずに書き留めながら、その日行ったことをすべて顧み、その後勇気とか愛とか美といった抽象的なものについて、心の中の偏見をすべて取り除き、またこうしたものが我々を包み込み、我々の中に浸み込んでいくのを待ちながら、瞑想することを勧めてくれた。こうした助言は賢明なものだったが、我々はその助言に従わなかったし、従ってもほんのわずかな間だけだった。彼自身はこのような修養を、いっそう厳しい困難な修養をほとんど生涯にわたって続けてきた。これによって、オレージがいかに偉大な人物であるかをいくらか知ることができるが、彼はこのことを口にしなかったし、また厳粛ぶったり、生真面目ぶったりするのは嫌いであった。イーこと G. W. ラッセルもまたそうであったかもしれないが、外見的には、オレージは機知に富み、都会的で、度々悪意に満ちた世慣れ人であったが、隠れた修養を積み上げてきた別人の顔ももっていた。長年続けてきたオレージの並外れた精神的努力の効果を彼に出会った人たちはだれでも感じることができた。こうして、彼には無言のうちに人を威圧する力や彼特有の魔力や魅力が備わっていた。彼に対して複雑な気持ちを抱いていたにもかかわらず、私は結局その魔力や魅力にかぶとをぬいだ。それこそが彼の正当な権利だとわかったからである。

私が『ザ・ニュー・エイジ』に加わったとき、この雑誌はすでに輝かしい最盛期を過ぎていた。エズラ・パウンドはまだこの雑誌に寄稿していた。彼とそんなに会っていたわけではないが、彼が作家たちに示した自発的で親切な振舞いを目の当たりにすることができた。ローマ兵のような唇と気まぐれで途方もない知力をもち、背が高くて浅黒い、弾丸型の丸い頭をしたセルビア人のドミートリ・ミトリノヴィッチ（一八八七―一九五三、ボスニア＝ヘルツェゴビナ生まれの哲学者、詩人、革命家、神秘家＝訳者註）は当時オレージに大きな影響を与えていた。『ザ・ニュー・エイジ』にも毎週世界情勢に関する突飛な概説を、彼独特のエネルギーに満ちてはいるが、理解しにくい英語で書き、寄稿していた。彼は時間の広大な経過過程しか存在しないような人物であった。ショーやウェルズのように数世紀前をみていたのではなく、何千年も前をみていた。この何千年も彼の黙示録的な知性にとっては明日のように近く、鮮明なものであった。彼は、有史以来の全歴史を一瞬の閃光のうちに、彼

が全歴史の中に一つの道を自らの力で切り開いた斧の一瞬の閃光のうちにみながら、また諸々の王朝や文明を蹴散らしながら、最も奇抜で最も深遠な思想を乱雑に吐き出した。オレージがグルジエフの指導のもとに身を置いた後、ミトリノヴィッチとオレージは関係を絶った。二人は友人であり続けたが、それぞれ別の道を歩んでいった。ミトリノヴィッチは度々我が家にやってきた。両腕にたくさんのビールをかかえてやってきては、宇宙、動物の創造、人間の運命、アダム・キャドモン(ユダヤ教神秘思想のカバラにおいて、「最初の人間、人間の原型」を意味する=訳者註)の本質、星々の感応力、客観的な批評学(彼は詩人や画家や音楽家の正確な偉大さを決定し、それを数式で表すことができると考えていた)、そのほか思い出せないくらいたくさんのことを延々と語った。数年後、ロンドンに帰ってから一度彼に会ったが、我々はその間それぞれずいぶん変わってしまい、旧交を取り戻すことはできなかった。あるいは世の中そのものがあまりにも変わってしまったのかもしれない。

第一次世界大戦後のこれら最初の数年はどこもかしこも幻滅感に覆われていたにもかかわらず、また『ユリシーズ』、『卓越したヴィクトリア人たち』、『クローム・イエロー』、『ヒュー・セルウィン・モーバリー』、さらに『J・アルフレッド・プルーフロックの恋歌』などが世に出ていたにもかかわらず、オレージを囲む仲間たちは大きな希望の雰囲気の中で生きていた。オレージ自身は社会情勢に関して十分かつ正確な考えをもち、今後待ち受けている危険を見抜いていたが、彼の希望は別次元にあった。ミトリノヴィッチにおいては、ヨーロッパを襲った黙示録的災難は単に黙示録的期待をもたらしたにすぎなかった。というのは、歴史そのものが信じられなくなったので、今や不信が普通のことになってしまったからだ。ちょうどその頃、オレージは、あまり批判的に読まなければ、何か得るところがあるかもしれないと言いながら、無名のアメリカの作家が書いた『バラ十字会の宇宙概念』(*The Rosicrucian Cosmo-Conception*)という本を貸してくれた。ミトリノヴィッチも同時に、本の名前は忘れたが、フランス語の本を貸してくれた。その本はアトランティスでの人間の誕生(このとき人間は首の空洞から炎が噴き出す頭なしの流出物であった)以来の歴史を記したものであった。そして彼もまたあまり批判的に読まなければ何か得るところがあるかもしれないと言った。バラ十字会の本には地方紙流に主天使、権天使、能天使などのすべてについて、それぞれの正確な数と機能を示しながら、詳述されていた。このような情報について著者はどのような権威をもっているのかとオレージに訊ねてみた。彼はこの質問に対し唯一もっともな返答しかくれなかった。つまり、そのようなことは自分で決めなければならないという返答であった。栄光に輝いている九階級の天使を見た人なら霊感の言葉を語らざるを得ないだろうから、このような悪文の本が啓示だとは信じられないと私は言った。この議論がどのような結末になったか覚えていないが、オレージがこういった類の神秘主義に関する文献をこれ以上私に貸してくれることはなかった。

フランス語の本は、人間の一歳が三六五日から成り立っているように、歴史の、もしくはすべての人類の一歳は三六五年で成り立っているという仮定で書かれていた。この計算でいくと、人類はアテネの黄金時代は小学生ということになり、エリザベス女王の時代は思春期ということになると思う。私はこれを覚えているが、これを証明する証拠、つまり、この時期人間がタバコを吸い始めたという証拠があるからだ。そしてこのフランスの著者の結論は、この単位で進んで行くと、人類はまもなく成年に達し、その後事態は好転するだろうということだった。この本に言及したのは、この本がやや大げさにミトリノヴィッチの人生観や、オレージの秘めたる哲学の中の、彼が普段は注意深く抑えているが、ときに抑えきれずに露呈してしまうものを表現しているからである。ミトリノヴィッチにとって、人類が膨大な年月の歴史を通して力強く成長してきた偉大な人間であったように、様々な人種や国家も偉大な人間の一部であり、みなそれぞれの機能をもち、その機能の相互作用によって人間の魂という総合的な器具を作り上げてきたのである。ドイツ、ロシア、フランス、中国、そしてイギリスはそのような機能であった。そしてこれらの国々が肥大化し、衰退したときに、大きな災難が起きた。人が災難を見越し、希望を失わず育むのはもっともなことだと認めたのはこの上なく単純化した歴史観であった。

またこの時期に、ヤンコ・ラヴリン(Janko Lavrin 一八八七—一九八三、スロベニア生まれの小説家、詩人、評論家、歴史家、翻訳家。E.ミュアとともに *European Quarterly* の編集者でもあった=訳者註)に出会い、彼の魅力にとりつかれた。彼を通して何人かの画家と知り合ったし、我々はアトリエでのパーティに出席し、自分の仕事をする時間がなくなるくらい多くの人たちと知り合いになった。ヤンコ・ラヴリンの提案もあって、二年後ロンドンを離れ、プラハへ向かったのはこういうことがあったからである。ヤンコはヨーロッパのほとんどを知っていた。彼はスロベニア生まれで、ウィーン、プラハ、オスロの大学に通っていた。第一次世界大戦中は、モンテネグロ前線にあった「ノーヴォエ・ヴレー

ミア」（*Novoye Vremya*）いうロシア語の新聞の従軍記者であった。またアトス山を訪ねたり、フィンランドの修道院に滞在したり、コーカサスでは徒歩旅行をしたり、さらにペルシャまで徒歩で行ったりした。彼はありとあらゆるところに行っていた。彼の放浪談義は我々を魅了した。プラハはヨーロッパの中央にあるし、最高のビールも飲めるし、また最高のハムも食べられるから、是非プラハに行ったほうがいいと言ってくれた。我々は四年もの間ロンドンを留守にした。

だが、ロンドンでの、またその後長年にわたる親友といえば、ジョン・ホームズであった。彼が手紙の中で述べている出会いの後、我々はロンドンで度々会った。ロンドンでホームズは情事の問題でとてもつらい時を過ごしていた。

ホームズは私より十歳若かった。彼は身分が普通とは違っていた（彼はラグビー校やサンドハーストの陸軍士官学校に通った）。また国籍も違っていた。父方でいうと、スコットランド系とアイルランド系の混成であり、母方では、十七世紀にリトル・ギディングに宗教共同体を創設したニコラス・フェラー（N. Ferrar 一五九二―一六三七、英国の神学者＝訳者註）の兄のジョン・フェラーの子孫であった。彼は軍人になるように仕向けられ、一九一五年末にハイランド軽歩兵大隊に入った。十七歳だった。第一次世界大戦中、戦功十字勲章を得たが、このことは彼に会って何年か経った後、間接的にまた偶然に知ったにすぎなかった。彼はこの栄誉をやや滑稽で恥ずべきものと考えていたと思う。彼は一九一七年にドイツ軍に捕えられ、それ以後ずっと捕虜として、カールスルーエで一年間、マインツで七か月を過ごした。ヒュー・キングズミルとの生涯にわたる友情が始まったのはこのときであった。当時キングズミルも捕虜であった。

ホームズは背が高く、痩せていた。そして額はエリザベス朝時代人のように立派で、髪の毛は赤褐色で巻き毛であり、目は茶褐色で、動物の悲しみを湛えていた。口は大きく、やや官能的であった。先の尖った顎鬚をわずかに生やしていたが、言葉を捜しているときにこの顎鬚をくねらしていた。ラグビー校では賞を獲得するほどの運動選手だったが、肉体的な存在としての彼の本能的な確かさと彼の意志の無気力とぎこちなさの間には妙な差異があった。体の動きという点では彼は力のある猫のようだった。木など登れるものならどんなものにも登るのが好きだったし、変わった芸当をいろいろとやることができた。膝を曲げずに四つん這いになってものすごいスピードで小走りすることができた。だが一方で、歩くのはうんざりであった。猫のようにじっと動かず、微動だにせずに何時間も座っていることができた。だが、そのときは、救いようもなく自分自身の中に深く閉じこもった囚人のように、限りなく憂うつな気分に満たされているようであった。体は楽しいことに向いていたが、意志は挫折に向いているようだった。彼の唯一の願望は作家になることだったが、書くという行為は彼にとってはかなり大きな障害であった。それはまるでどのように行動したらよいのかわからないかのようであったし、また単純でありふれているが、不可解ななぞのようでもあった。彼は自分の弱点を知っていた。それゆえ、自分に才能があるのを知っていたが、その才能を発揮できないのではないかと恐れていた。自分に才能があるという認識とその才能を発揮できないのではないかという恐れがとうとう彼の中で凝り固まり、彼を無気力にした。彼は恐ろしい夢と悪夢にひどく悩まされていた。

彼の知性は強力で明晰、理路整然としており、どんな問題にも関心を向けたし、物事が真実の姿をとるようにし、また天地開闢の初日のように物事が互いに原初の関係をもって現れるようにする魔法のようなものであった。彼の話も、多くの場合、同様の印象を与えた。話はぎこちなく、外面的な精彩を欠き、一つの文章を言い終えることができない場合が多かったが、その文章を通して、最初の暗い、もしくは輝いた輪郭を有した物事の原初の概念を何とか表現しようとした。彼の話はかなり中身が詰まっていたが、それゆえ、最高に深刻な話も薄っぺらで、ありふれた話のように思えたし、また彼が間接的に自分と比較せずにはいられない何人かの偉大な作家について話していたとき以外は、常に直接入手した客観的なものであった。

ホームズは子どもっぽい頑なさである詩の一節に、特に個人的な喜びや、「強烈な恐怖感」と彼が呼んでいたものを与えてくれる一節に執着していた。彼と知り合いになったとき、彼はいつも、

深い悲しみは私の魂を人間らしくした、

を繰り返していた。というのも、ロンドンで彼がかなり苦しんでいた情事によって自分の魂が人間らしくなったし、もっと人間らしくなる必要があると感じていたからである。彼は私よりもはるかに長期間、つまり子どものときから様々な恐怖に苦しめられてきた。そしてその恐怖の表現をまたもワーズワース（W. Wordsworth 一七七〇―一八五〇、英国のロマン派詩人で桂冠詩人＝訳者註）に見出し、重々しい調子で吟唱していた。

以前の考えが再び戻ってきた。ぞっとする恐怖、
実現を期し難い希望、（田部訳）

(彼は特に二行目を称賛していた)とか、

それは私を憐れむので、私の悲しみを憐れむのではない。(田部訳)

新しい詩の一節が彼の想像力をとらえると、彼はいつも愛情を込めてそれを持って来て見せてくれた。ある夏の夕暮れ、ホームズが庭に座って、

なぜ私は私の誠実の範囲を越えて汝の金髪をみると嬉しくなるのだろうか。

と詠唱していたのを覚えている。その日の夕暮れは静かな黄金の輝きに満ちていた。その黄金に輝いた「金髪」はさぞかし想像を絶するほど鮮やかな色彩を帯びていたであろう。

ホームズに出会った最初の日だったが、我々がグラスゴーの田舎を散歩しながら過ごした長い夏の日から戻ってきたとき、彼はダン(J. Donne 一五七二―一六三一、英国の形而上詩人=訳者註)を引用しはじめた(そのとき私はダンを知らなかった)。我々は畑の木戸に寄りかかっていた。そして干し草の香りが鼻孔に漂ってきたとき、彼は吟唱した。

そして空中で我々の魂が交渉している間、
我々二人は墓の石像のように横たわり、
一日中同じ姿勢でいた、
そして一日中何も言わなかった。

おそらく、丸められた干し草の山と古くて丸みを帯びた墓との微かな類似性にとりつかれて、彼は『聖なる遺物』(*The Relic*)の最初の節に進み、大喜びして「あわただしい最後の審判の日」というところと、復活した魂が「束の間の逢瀬を楽しむ」ために恋人の墓の側で待っている描写のところで止まるのであった。最後の三十分の間、我々は求愛のカップルの長い行列が反対方向に進んでゆくのに遭遇した。我々が木戸に寄りかかっていると、彼らは我々のところを通過して行った。それは静かな夕暮れの光を浴びた至福千年を思わせるような行進だった。おそらく、ホームズにトラハーン(T. Traherne 一六三七/九―七四 英国の形而上詩人=訳者註)の「決して刈り入れられるべきではないし、種も蒔かれたことのない東洋の不滅の小麦」という一節を思い起させたのはこの行進であったろう。というのは、彼はその一節を吟唱し始めたからだが、私はダンのものよりこの一節に深く感動した。ホームズは幼年期についてトラハーンやヴォーン(H. Vaughan 一六二二―九五 英国の形而上詩人=訳者註)やワーズワースと同じ理論をもっていたが、この理論は彼の霊魂不滅の信仰と深く結びついていた。やがて彼は私を霊魂不滅の信仰へと向けさせてくれた、というか、私自身の信仰が彼の信仰と同じだということを私に理解させてくれたと言ったほうがいいかもしれない。

ホームズは自分の才能とそれを発揮できない無念を知っていたので、自分を哀れに思ったし、また時に、二流の人物が世間の称賛を浴びているのを知ると、その人物を冷笑的に批判することもあった。こうしたことは彼の挫かれた願望をかき立てた。私と違い、彼はとても野心的であったし、絶えず自分を、現存の作家や過去の作家を問わず、他の作家と比較していた。彼は死者さえも安楽に眠らせようとはしなかった。彼は人生に絶望し、それゆえ修道院に入ろうと考えたときもあったようだ。真剣に考えたことなのか、思いつきだったのかはわからない。それにしても彼の優れた体格と飲食を含めた肉体的なことすべてにおける彼の強烈な楽しみを彼は持て余していた。彼の善良さは――そして彼は、他の人には見られない生来の善良さと善への感覚を単純で自明なものとしてもっていた――本来こうしたことと深く関わっていた。彼の善良さは、人類の堕落が決して起こらず、この世は悪の到来を今もって待っていると時々人に思わせるほど、自然であった。これらの楽しい時間は常に、たくさんの牛、肥沃な畑、満々と水を湛えた川、尽きない食べ物と飲み物といったように、ものが豊富にあるという感覚をもたらしてくれたし――すべてのものが本来の法則に喜んで従っていた――またアダムの世界に戻ったかのようであった。そうした時間は愛情と楽しみ(彼とは切り離せないもの)の時間でもあった。そうした時間が永久に続くように時間を止めたいと望んでいるかのように、彼の中にまだ生き残っている子どもっぽい頑なさでそうした時間にしがみついていたが、そういう時間にしがみつくことはそういう時間の質を落とし、腐敗させた。彼にはピューリタン的な厳格さはまったくなかったが、深い害悪感や罪意識をもっていた。というのは、自分はこの世のわなに引っかかり、不面目にもこの世に反発しながらこの世との絆を楽しんでいる不滅なる霊であると感じていたからだ。彼は自分の才能を発揮できなかったが、それゆえにこの感情が強烈になり、罪意識もかなり深くなっていった。そしてこの感情は自分が作家になることは決してないとはっきり認識したとき、さらに強まった。

ホームズは私が出会った中で最も注目に値する人物であった。彼を深く知った人は必ず彼から影響を受けたが、その影響は我々の友情の自然な結果であった。彼は私には影響を与えようとはしなかった。彼はそのような弱さ、あるいは虚栄心を

もっていなかった。彼の知性は私のよりはるかに強力であることを私は認めていたが、彼の知性は私にはいつも開かれていたし、また自由に使えたので、それは自分の知性ではなく彼の知性だなどと考えて羨んだり、妬んだりすることはまったくなかった。彼の知性はプラトンの知性がもっていたとジュベールが考えた特質をもっていた。誰でも彼の知性の中で生きることができたし、その中を歩き回ることができたし、その中でくつろぐこともできた。結果として、彼は忍耐をかなり蓄えた。というのは、忍耐というのは強さや強さの自覚の究極の証明であるからだ。人の話を聞いて、それは違うのではないかと思ったときの私自身のとっさの反応はその言葉に異議を唱えることだったが、ホームズはソクラテスの手法を使い、追跡して行けば何か偉大な真実に導かれていくかのように明らかに追跡することに関心をもって、忍耐強く結論に至るまで議論を追跡していった。今の段階では私に与えた彼の影響を分析することはできない。というのは、その影響が彼の知性だけでなく、彼の人間性全体によるものであったからである。彼が私に教えてくれたことの一つは、物事を自分自身の目でみること、物事を、たとえそれがかなり怪しくありそうにないようにみえても、真剣に受け止めること、そして決して物事を何らかの見解や先入観をもって払い退けたりしないということであった。彼が私にそうするように教えてくれたと言ったが、彼自身が心してそうやったという意味ではない。私が彼の知性を自由に利用して、そうしたことを学んだにすぎない。我々の知性はお互いに完全に開かれていたのである。

ホームズはオレージのように人格をもった人物ではなく、ゲーテ（J.W. von Goethe 一七四九―一八三二 ドイツの詩人、劇作家、小説家、政治家。著作に『若きウェルテルの悩み』や『ファースト』などがある＝訳者註）の言葉を使えば、「ありのままの人間」と呼べるものであった。私は人格をあまり高く買わない。最初オレージとうまくいかなかったのは、ひとつにはこの人格のせいだったからかもしれない。人格というのは明らかにその所有者と時間が共同で作り上げた結果であり、これは明らかに「つくられた」ものである。その腕前がどんなに魅力的で優れていても、所詮我々はそれにうんざりするのである。オレージはひとつの人格以上の人物だったが、自分の本当の力を用心深く守るかのように、その「以上」を独り占めにしていた。そして彼が世間に向けていたのは彼の人格だった。彼はそれをあまりに誇りすぎていた。ホームズはこの人格をほとんどもっていなかった。彼が人に深い感銘を与えたとすれば、それは純粋で汚されていない力によるものであった。もし彼が中年まで生きていたならば、失意の中にありながらも、人格を備えた人物になっていたかもしれない。というのは、彼はいくらか虚栄心をもっていたし、またおそらく心して自分を人格ある人物に作り上げようとする人はみな深い失意と救いとなる虚栄心をもっているからである。それゆえ、仕舞いには我々は人格者を大目に見たり、用心して彼の周辺をうろついたり、本当の人間には許さない多くのことを人格者には許したり、作られたものとしての、つまり人格者自身が作り出したものとしての特質を評価したりするのである。人格者が本当に二流であることを示すには、ヒュー・キングズミルに宛てたホームズの手紙の中の次の言葉を思い出してみればよい。「最高の高みに達した個々人の自己表現と宇宙との合一は同一である。」もし魂が不滅で、人格がそうでないなら、我々の真の仕事は明らかに人格を涵養することではなく、除去することである。